

がん教育プログラム

モジュール

9

がん患者と共に 生きる社会

文部科学省 がん教育推進のための教材
「9 がん患者への理解と共生」対応

**がん患者と
どのように接すれば
よいのだろう**



がん患者とどのように接すればよいのだろう

事例1

友人という時間は、病気とは何の関係もない自分でいられる時間です。

何でもない話をして、一緒に笑って、共に過ごすことで、「患者」としてではない、これまでどおりの「自分」を取り戻せるような気がします。

(患者手記より)





がん患者とどのように接すればよいのだろう

事例2

友人にがんになったことを伝えたとき、「生活習慣が悪いからがんになったんだ」と、あつけらかなと言われました。



わたしは共働きで、妻と交代で食事を作っていましたが、常にバランスの良い食事を心がけていたつもりですし、妻も責められているような気持ちになり、悲しくなりました。がんに対する誤解や決めつけがなくなればと思います。 (患者手記より)



がん患者とどのように接すればよいのだろう

事例3

親戚にがんになったことを伝えたとき、「かわいそう」と泣き出されてしまいました。



心配してくれてありがたいという気持ちはあったものの、親戚の態度に、もうわたしは治らないのではないのか、死を待つしかないのではないのかという気持ちになり落ち込みました。(患者手記より)

家族や友人に
これまでどおり
接してほしい。

がんを
正しく理解し
てほしい。



がん患者には
さまざまな願いがある

がん患者が
暮らしやすい社会
とはどのような
社会だろう



がん患者が暮らしやすい社会とはどのような社会だろう

営業の仕事で働いていましたが、30代でがんとわかり、手術と抗がん剤治療を受けました。今も定期的に病院に行って体調を管理しています。体力が戻りきらず、仕事を続けることが難しくなり、退職せざるをえませんでした。好きな仕事だったので、本当に残念でした。ただその後、病気のことを理解してくれる職場と出会い、今は、体調を優先して働くことができます。(患者手記より)



がんについて
周囲の理解が
ある。

がんの治療に
周囲の協力が
得られる。



がんへの正しい理解が
誰もが暮らしやすい社会につながる

振り返り

- ☑ 家族や友人に対して、がん患者はさまざまな願いをもっている。
-
- ☑ 全ての人ががんについて正しく理解することが、だれもが暮らしやすい社会につながる。

資料

がんの治療と仕事の両立

Q あなたの職場は、がんの治療や検査のために2週間に一度病院に通う必要がある場合、働き続けられる環境だと思うか。

そう思う

37.1%



がんの治療と仕事の両立

Q がんの治療中に、治療と仕事を両方続けられるような支援または配慮を、職場や仕事上の関係者から受けたと思うか。

そう思う
ややそう思う

65%

